

(口絵解説)

花の病害虫(15)——カーネーション——

カーネーションの生産状況

バラ、キクとともに、相変わらず日本の3大花きの一つとしての地位を保っているカーネーションである(1991年の全国生産量616ha)が、最近では品種的な面で変化がみられている。すなわち、かつては大輪系一辺倒であったものが、近年では可憐なイメージのスプレー系品種が大きく生産量を伸ばしている。

また、栽培体系にも変化がみられる。以前は、“母の日”のプレゼントとして5月を中心とした春期に収穫が集中していたが、今では高冷地での夏～秋切り栽培や、秋口からの加温による3月収穫を中心とした栽培型もある。

カーネーションの病害虫の発生と防除

問題となる病害としては、萎ちょう細菌病、立枯病、萎ちょう病、斑点病が栽培地域に関係なく発生するのに対し、斑点細菌病、さび病、灰色かび病、疫病、芽腐病及び各種ウイルス病は産地によって発生程度が大きく異なる。

害虫については、ダニ、アザミウマ、タバコガ、アブラムシがほとんどの圃場で問題になるのに対し、ヨトウガ(ハスモンヨトウ)、クロウリハムシ、ケラ、コオロギ、センチュウ類は発生地域に偏りがみられる。

萎ちょう細菌病、萎ちょう病、疫病といった土壤伝染性病害の防除は、無病苗の確保と植え付け前の土壤消毒の徹底に尽きる。土壤消毒には、蒸気を用いる方法と薬剤を用いる方法があるが、蒸気の場合はパイプ直下は温度が上がりにくいことに留意し、処理中に温度計を差し込んで60°C以上を保っているか否かをチェックする。薬剤を用いる場合には、ベッド、ベンチの隅は菌が生き残りやすいことに留意し、薬剤注入の間隔を標準よりやや狭めるといった工夫が必要である。さらに、疫病防除の基本として、土壤の排水を良好にすることを心掛け、薬剤にのみ頼らないようにする。

立枯病は、かつては土壤伝染性病害として扱われ、萎ちょう細菌病などと同様、土壤消毒が最重要であるとされてきた。しかし、土壤中から分離される多量の赤色系フザリウム菌はほとんどが非病原性のフザリウム菌であり、本病病原菌の密度はかなり低いことが明らかになってきた。本病の重要な伝染源は、圃場の周りに放置され

たカーネーション残渣と、ススキなどのイネ科雑草の上で形成された分生孢子(寒冷地では子のう孢子)であり、これが飛散・感染する。したがって、こうした植物体の処分を行うとともに、摘芯・摘蕾といった作業を行った後に薬剤散布することが大切である。また最近では、東北・北海道地方でもカーネーションの栽培が盛んになってきたが、病原菌の中で最も一般的な*Fusarium graminearum*(完全時代*Gibberella zeae*)は、ムギ類赤かび病菌としても著名であり、ムギ穂上で多量の孢子を形成するとともに、イネの刈り株で越冬して翌年の伝染源になることにも留意されたい。

斑点病の防除は、発病葉のこまめな摘み取り処分と、定期的な薬剤散布によって行う。なお本病は、葉のほか、さし芽中や植え付け直後に茎に発生して、苗腐れ症状を引き起こす。これを防ぐには、さし芽前に発病葉を丁寧に摘み取っておくことと、さし芽を冷蔵庫で保存する場合には多湿にならないようビニル袋でなく紙袋に入れておくことである。芽取り前またはさし芽前の殺菌剤散布は、斑点病・立枯病の同時防除に有効である。

斑点細菌病は風雨によって伝染するので、発病圃場では雨除けの工夫をする。病原菌はトウモロコシ、ブーゲンビリア、ストレリチア、チューリップ(球根)、ルスカス等非常に広範囲の植物に病原性を有する。

芽腐病は灰色かび病と間違えやすいが、柱頭または内側の花弁から発病が始まる。こうした発病過程から、蕾内に侵入する虫によって孢子が媒介されている可能性があるものと考えている。

ウイルス病防除は茎頂培養による無病苗の作出が最も効果的である。

ダニとアザミウマについては、花卉に致命的な被害を生ずるので、薬剤散布は必須であるが、抵抗性の問題(ダニ)と花弁奥まで薬剤が届きにくいこと(アザミウマ)から、なかなか徹底した防除を行うのが難しい。

タバコガとヨトウガの防除は、発生初期に数回薬剤散布する。ともに致命的な被害を生ずることと、老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するためである。

クロウリハムシは、人が近付くと下に落ちて死んだようなふりをするので、騙されずに株元まで十分に薬剤を散布することが大切である。また、5mm以上と比較的大きな虫で、カラスウリ等から圃場に飛来してくるので、施設栽培では入り口や換気窓に防虫網を張るのも効果的である。防虫網はヨトウガ防除にも役立つ。

(静岡県中部病害虫防除所 外側正之)